

高崎駅と七千円

大学入試は昔も今も厳しいものだが私は昭和二十三年生まれ、戦後ベビーブームの第一波とあって、常にも増して厳しい受験戦争を強いられた世代である。頭の都合から国立大へは失敗し、かろうじて通してもらったのが群馬県の高崎経済大学であった。実は前年の受験にも失敗しており、いわゆる一浪の身であったが浪人時代の一年間、アルバイトで少しばかりの貯えがあったものだから国立大より高い授業料を支払う事が出来たわけである。

四国の人間である私が高崎市を知る由もなかったが、合格して初めて地図帳を開き、日本のへそのような所にある高崎市を発見した時には少々の溜息が出た。

母に経済的負担をかけるわけには行かないので自活しながら学生生活を送るつもりでいたものだから、計画は最初から楽なものではなかった。一年間のアルバイトの貯えは早くから無くなってしまい、何とかなるさで列車の切符を買い、高崎駅へ辿り着いた時の所持金は、たったの七千円だった。朝夕食付きの学生寮が月四千五百円という有り難い時代だったが、入寮するや前払いで寮費を取られて、いきなり残りが二千五百円となってしまった。窮すれば通ずとはいいが、この際通じてくれなければどう

にもならない。

考えた末に学生寮の世話をしてくれているオジサン夫婦に直訴に及んだのが正解だった。オジサン早速、学生課の上司とやらに電話をしてくれて、群馬弁でまくし立ててくれた。

「困ってる学生さんがいるんだいね、家庭教師のバイトを一つやってくんない」といった具合にである。五分もしないうちに返事があり、すぐ学生課に來いとのことと、恐る恐る訪ねてみると既に家庭教師のアルバイトを準備してくれていて、今晚にでも挨拶に行つてこいとのことであつた。有り難くて涙が出そうになつた。

しかし、一難去つて又、一難、家庭教師の家は寮から遠く、とても歩きでは無理なため自転車が必要であつた。これも投資と判断し市内の自転車屋を物色した挙句、中古の千五百円也を見つけ出し、即金で買えば残金はちようど千円となつた。

この中古自転車は私と四年間の苦樂を共にする事になつたのだが、やはり安物は安物。三月も経たない内にカバーやらランプやら荷台が脱落して行き、タイヤとチェーンとハンドルとサドルだけのシンプルな一物と化してしまつた。学友は競輪の自転車みたいだと言つてくれたが、そんなにカッコイイ物ではない。第一雨が降ればタイヤのハネで背中が泥だらけになるのだから。

とにもかくにもやつと調達した自転車で件の家庭教師の家に夕方には挨拶に行く事が出来たが、明日からでも来てくれと月謝を一月分四千五百円頂いた。これで助かったと実感した。きっと寮のオジサンが前払いしてくれるように頼んでくれたのに違いないと改めて人の親切が身にしみた。

今もって寮のオジサンとオバサンとは音信があるが、あの時の感謝の気持ち忘れたいことはない。反面お金の問題も一生懸命やってれば何とかなるさと変な自信が当時より染み付いてしまつて、今もって金が無くても平気でいられるのも困ったものである。

そろそろ老後を考えるに、慌てなければならぬ時期が来ている。あの時から三十五年経ってしまった。

平成十四年 著